

がん患者体験記◎浅川澄一

現在、がん治療まっただ中の浅川澄一さんによる体験記です



抗がん剤終わる

抗がん剤治療が遂に終わった。10月23日に12回目の投与があり、これで8か月続けた一連の治療が終了となる。

ところが、今回は今までにない激しい副作用に襲われる。

まず、味覚異常が一段と深まり、食事への興味が薄れてしまう。口の中に何とも言いがくはない細かい異物が入っているようで気持ちよくない。ただ、食べないことには日常活動に支障をきたすので食事時間には料理を口に押し込む。

次に、足の裏のシビレがひどい。細かい小石がいっぱい張り付いているようで、感覚が遠のいている。足が地についていないようだ。自宅でスリッパのままフローリングの居間から畳の部屋に入ってしまう、「アレッ」と気がつき、あわてて揺さぶっ

てスリッパを脱ぐ。

足裏の感覚が麻痺しているために、スリッパをはいている実感がなためだろう。

手先が黒っぽくなり、指の先端部のシビレも引かない。今までなら、点滴を終えて4、5日もするとほとんど気にならないくらいに消えていたが、今回は2週間経っても強いシビレが残ったままだ。

シャツのボタン掛けやボールペンでの筆記、コップの持ち上げなど指先に力を入れねばならない作業がうまくいかない。こちらで感覚がマヒしているからだろう。

さらに、ふらつきも多くなった。歩行中にまっすぐ歩こうにも足腰が勝手に右左に揺れてしまうときがある。立っているときに、思わず2、3歩後ずさりすることもある。

一日の疲労度も強く、23時頃にはベッドに向かわざるを得ない日が増えた。ところが、それが早起きにつながってしまい、睡眠時間が変わらないのはどうしたことか。

そして、最も困っているのはおなら、屁である。時や場所を問わずに「ブリッ」と催してくる。出かかっているのに、我慢するのも限界がある。「仕方ない、いいかな」と思って、放つと意外なほど音が大い。周りの人に気がつかれたかな、と一応見渡す。

地下鉄内で座っているときは、周りに人がいないのを確認してから尻を少し持ち上げて放つ。出て来る屁は防ぎようがない。

多い日は、20発ぐらい「ブリッ」「ブリッ」。少ない日でも5、6発は出る。

抗がん剤の担当医に話すと「手術によるものかもしれない。抗がん剤の副作用とは言い切れない」と、何ともあやふやな返事だ。原因はどうでもいい



11月7日 英国アドミラルナースを招いてのセミナーで（東京）。

福祉ジャーナリスト（前・日本経済新聞社編集委員）

慶應大学卒後に日本経済新聞社に入社。小売り・流通業、ファッション、家電、サービス産業などを担当。87年に月刊誌『日経トレンディ』を創刊、初代編集長。流通経済部長、マルチメディア局編成部長などを経て、98年から編集委員。高齢者ケア、少子化、NPOなどを担当。2011年2月に定年退社。公益社団法人長寿社会文化協会（WAC）常務理事。66歳。日本城郭検定3級。



が、難儀をしてるだけに、早く症状が消えることを祈るばかりだ。



11月4日に抗がん剤担当の医師の診察があり、こうした身体の不調を訴えた。「ふらつきの原因が足裏のシビレによるのかは、断定できません。前々回からステロイド薬を止めてますので、もしかするとその影響かもしれない」とのこと。

ステロイド薬とは、私の場合は「デカドロン」である。錠剤で、1回に8錠を飲み、2日分貰う。点滴の翌朝と翌々日の朝に飲む。万有製薬がつくる副腎皮質ホルモンである。

デカドロンをネットで検索すると「副腎皮質ホルモンとは、副腎という臓器の外側の部分（皮質）から分泌されるホルモンで、ステロイド・ホルモンとも呼ばれ、生命や健康を維持するためには欠かせない物質です。副腎皮質ホルモンには、炎症を起こす原因物質に働きかけて強力に炎症を抑える抗炎症作用、血管の壁をち密にして出血を防ぐ止血作用、病気や外傷など人体に加わったストレスに対する抵抗力を増す作用などがあります」とある。

私への効果は、この中の最後に書かれている「病気や外傷など……」にあたるのだろうか。これを止めたため、と言うことは、この薬が今まではよく効いていたことになる。

医師は言葉を継いで、「味覚異常はそのうち治りますよ」と言う。どのくらいの期間で正常に戻るのだろうか。

「あと2～3か月はもっと副作用の影響が出てくるでしょう。元に戻るのはその後からですかね」。

予想以上にきびしい見通しを聞いて、いささか落胆気味になる。

抗がん剤が終われば、一気に回復とまでは期待しないが、それに近い状況を想定していたのに。まあ、仕方ないか。

さらに「気をつけてほしいのは食べ過ぎです。味覚異常が治るといい気になってたくさん食べてしまう人がいます」と忠告を受ける。太ることは未経験なので、この言葉には「ほんとかな」と首をひねる。



自分ががん患者になってはじめて、新聞や雑誌などのがん関連の記事に敏感になってきた。

つい最近、脳外科専門医で東大の副学長などを歴任した桐野高明さんの岩波新書『医療の選択』を読んでいると、「直腸がんや胃がんでは、諸外国と比較しても圧倒的に日本の外科手術の成績が優れている」（25頁）とあった。日本の医療に不満をもつ国民は多いが、技術レベルでは海外からの評価は相当に高い、という文脈の中での記述である。

「そうなのか」と、幾分気持ちが明るくなる。

その数日後の11月2日の読売新聞を手にとると、「胃がん 腹腔鏡手術広がる」との見出しに引き込まれる。全国の病院が2013年に手がけた手術数が一覧表で掲載されている。手術数が多ければ、それだけ経験豊富で技術が向上する。「手術数が多いのがいい病院」とまでは言い切れないようだが、それに近いことは確かだ。アンケート調査で677病院から回答を得て、上位187病院を掲載。

がん患者で最も多いのが胃がん。大腸がんは食

生活の欧米化で近年急速に増えており胃がんを抜いて第1位になる日も近いと言われる。前述の岩波新書でも両者は似たような状況にある。そのうえ、私の大腸がんは開腹手術ではなく、紙面の見出しにある身体に負担の少ないより進んだ腹腔鏡手術。

これだけの背景があるのだから、目を凝らして読まざるを得ない。

手術数が多い第1位はがん研有明病院（東京）で551件。第2位の県立静岡がんセンター（静岡市）の351件、第3位の国立がん研究センター中央病院（東京）の342件を大きく引き離して断然トップである。4位以下は200件台が続く。

読売新聞が2014年2月に発行したムック「病院の実力」では同様の調査で2012年の手術数を掲載している。そこでも、がん研有明病院が528件で1位。376件の国立がん研究センター中央病院、僅差の370件の県立静岡がんセンターが2、3位であった。県立静岡がんセンターが3位から2位にランクアップしたのが注目される。

私が手術を受け、通院するのはがん研有明病院。この数字を見る限りは、がんの専門病院として信頼がおけるのは間違いなさそうだ。

次に手術方法の先端技術、腹腔鏡の実績を見ると、293件のがん研有明病院が第1位。2位は206件の国立がん研究センター東病院（千葉市）。3位に141件の佐賀大学病院、4位に大阪市立総合医療センターが入り、以下県立静岡がんセンターを含め100件台が7病院続く。

またしてもがん研有明病院の優位は揺るがない。



抗がん剤治療を続けながらも、国内に取材や講演で出歩き、6月にはオランダ、9月は英国にとともに8日間滞在した。11月7日にはロンドンから「アドミラル・ナース」の創案者を招いたセミナーを開き、前段としてアドミラル・ナースの背景説明を行った。翌日は、卒業校の慶応大学で毎年開催しているゼミのOB・OG会で、「製薬業界」についての話をした。

このほか、経済誌「ダイヤモンド」のオンライン版に毎週、介護系新聞「高齢者住宅新聞」にもほ



がん研有明病院

ぼ毎週執筆を続けている。

こうした活動をしているときには副作用を忘れてしまう。だが、ちょっと一息つくようなときに副作用を実感させられる。それも抗がん剤投与の9回目あたりからだから、まあ我慢できる範囲内だ。これが初期からだとは止めたくなかったかもしれない。そういう患者の話もよく聞く。私の場合は、不幸中の幸いなかもしれない。



そして、これまでの抗がん剤の「効果」を見極める日を迎えることになった。11月27日である。

この日は、いつもの血液検査のほかに、CT検査を行った。浴衣に着替えて検査室に入る。ベッドに寝たまま、無機質な白い機械のトンネルに引き込まれる。「はい、息を吸って、そのまま止めて」とう、6回繰り返す。

その後に、いよいよ診察である。

結果は「異状なし」であった。よかった。医師は目の前の画面に私の内臓を次々映し出し、「何もないでしょう」とのたまう。事前に「9割以上の確率で大丈夫ですから」と言われていたが、不安が消えてはいなかった。これで12回、8か月に及んだ抗がん剤治療は完全に終わった。

次は、2015年3月に予定している内視鏡検査である。この先、いつどこに転移するかは神のみぞ知る、という心境だ。☹